子どもを真ん中に保育を考えるⅤ
―子どもの「なる」姿をめぐって―

○企画・進行　佐藤寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園）　指定討論者　村石理恵子（東京女子体育短期大学）
話題提供者　伊川千晶・田村郁・谷地理沙（お茶の水女子大学附属幼稚園）

１．企画趣旨

遊びや生活の中で、子どもたちは、よく何かに「なる」。遊びの中での役になりきることもあれば、憧れの対象、こうなりたいと思う理想の姿になる場合もある。何かになるタイミングはそれぞれで、遊びの流れでなることもあれば、突如、何かになっている場合もある。素の自分と、何かになっている自分との間を、行きつ戻りつしながら、子どもたちは、何を感じ、何を表現しようとしているのだろうか。

子どもたちとの関わりの中で、何かになっている姿と出会い、その意味を理解しようとすると、同時にその子どもの「ある」姿についても考えたくなる。なりたい自分に「なる」ことと、自分らしく「ある」ということを、私達保育者は、どのように受け止め、目の前の子どもたちと関わっているのだろうか。３歳児、４歳児、５歳児の「なる」姿に触れ、面白がりながら保育をしている保育者の語りから、子どもの「なる」という表現や「ある」姿について、考察を深めていくことができたらと考えている。（佐藤寛子）

２．話題提供

「プリンセスになるA児　３歳児」

２学期の初め、A児が「お姉さんみたいにスカート履きたいの」と言いに来た。一緒に行ってみると、５歳児がドレスのようなスカートを身につけて遊んでいる。A児も借りて履いてみるが、サイズが大きくて躓いてしまった。そこで３歳児にも扱いやすそうなシフォンの布を出してみることにした。早速A児に「つけたい！」と言われ、マントのように背中に結ぶと、プリンセスになって動き始めた。嬉しそうにくるくる回ってみせる姿を、周りの人達はじっと見つめたり、「つけてみたい」と私に言いに来たりして、初めて出合うものと、それを使ってみるA児の姿に興味津々の様子が伝わってきた。数日経つと使ってみたい人が増えた。それぞれに思い描いたものになって動き出す様子を嬉しく思いながら、毎朝「つけて」と押し寄せる子ども達に大急ぎで布をつける日々が続いていった。

１学期は、５歳児や４歳児の遊びに混ざり、おっとりと過ごすことの多かったA児だが、この頃から保育室で過ごすことが増え、同じように布をまとってプリンセスになる人達と一緒に遊ぶようになっていった。関わりが嬉しそうな一方で、友達に「そうじゃない！」と怒ったり、私に「早くしてー！」と気持ちをぶつけたりすることも増え、５歳児や４歳児とは違うクラスの人達と関わることへの戸惑いが伝わってきた。揺れ動くA児の気持ちを受けとめつつ、それでも毎日布を身につけてプリンセスになり、また友達と関わってみるA児の姿が嬉しくて、A児の“なりたい”気持ちが実現していくように、そして友達と関わり合うことが心地良いものになっていくようにと願い、私も一緒になって遊びながら支えていった。

２学期が終わる頃、A児から色々なイメージが出てくるようになった。「お花を持って舞踏会へ行きたいのよ」「ガラスの靴を作りたいの」と話し、部屋に飾っていたドライフラワーを嬉しそうに抱えたり、リボンを作って上履きに貼ってみたりする姿から、A児の中の“こうなりたい”思いが深まってきたことを感じた。

３歳児と過ごしていると、布一枚だけで何かになれるような、子どもの持つ柔らかさを度々感じる。そして、一人ひとりの思い描くイメージを受けとめ、実現するようにと試行錯誤して関わる中で、子ども達の中にある思いが少しずつ深まってきたように思う。一方で、“なる”を支えるものがあったことで、まだ言葉が拙い３歳児同士の関係性の中でも、イメージが伝わり合ったり、「同じ」を喜んだりする繋がりが生まれてきたことも感じている。自分らしく“なること”を楽しむ中で、周りとの関わりもゆっくりと広がり始めている。（谷地理沙）

「恐竜になるB児　４歳児」

４歳の１学期。３歳からの進級の子どもたちと、４歳から入園してきた子どもたちとが入り交じった新しいクラス。環境が変わり、担任が替わり、それぞれの子どもたちがドキドキしながら過ごしている中、３歳からの進級児のB児が恐竜になって、友達に近づいていくが、本物さながらの表情や勢いに驚かれ、「恐い！」と相手に泣かれてしまうことが続いていた。その相手の反応にB児自身も戸惑い、「一緒に遊びたいのに！」と一緒になって泣き出すことが多かった。その都度、B児にどんな恐竜なのか、好きな食べ物は何なのかなど、イメージを聞きながら、身体をなでてみたり、食べ物を作ってあげてみたりなど、関わり方を探ってきた。教師が関わっているのを見て、少しずつ周りの子どもたちも一緒になって食べ物をあげてみたり、頭をなでてみたり、B児へ関わっていくことが増え、恐竜になったB児と一緒に遊ぶことを楽しむ姿が多くなっていった。２学期になると、「僕も恐竜好きなんだ！」と友達に声をかけられ、一緒に駆け回る恐竜仲間ができた。互いに何の恐竜なのかを伝え合い、恐竜になりながら鬼ごっこに仲間入りすることもあった。また、恐竜だけではなく、ネコやイヌなどになって、ままごとの中に入っていくことも出てきた。設定や状況を伝え合いながら、なることを繰り返し楽しんでいた。

１学期の始まりは子どもたちの緊張や不安も大きく、安心する遊び、場所、ひとを探っていることが多い中、恐竜になって積極的に友達に近づいていくB児。友達と一緒に遊びたい気持ちは十分に伝わってくるが、恐竜になっていると表情も声も恐く受け取られ、それが友達に伝わりにく

©日本保育学会

かった。B児が“恐竜が好き”、“恐竜になりたい”という思いは大切にし、好きなものになりながら友達とつながっていけるように橋渡しを重ねてきた。周りの子どもたちもB児が何かをしてくるわけではないということがわかってくると、自分から恐竜に関わって面白さも見出すようになっていった。受け入れられるようになると嬉しく、B児自身も友達の思いに耳を傾けながら、恐竜にこだわらず、様々なものになって遊ぶようになったのが２学期の面白い変化だった。

どんなに相手に泣かれても、恐竜になることはやめなかったB児。何かを身につけるわけではないが、表情や仕草が本物の恐竜のようで、私自身はここまでなりきれるのはすごいなと感心していた。ただ、B児は恐竜になりながら友達とつながりたいという思いも強かった。自分とは違う友達の思いや考えを知り、戸惑うことの多い４歳のこの時期だが、B児のその思いや面白さが周りにも伝わるといいなと関わってきた。B児に色々と質問していくと、恐竜ではないB児にふと戻って会話を始めるのも面白く、素の自分と恐竜とを行ったり来たりしながら、なることを楽しむ姿があった。のびのびと何かになる子どもたちを見ていると、安心して過ごせているのかなと感じ、なる姿をとことん支えたいと思う私がいる。そのうちに、様々な思いを次々に表してくる子どもたちにふれ、また支えたいと思う。一人一人が何かになって表現している姿を考えてみることは面白く、大切にしていきたいと改めて感じた。また、そこにどう関わっていくのか、保育を考えるきっかけともなった。（伊川千晶）

「何かになるC児　５歳児」

１学期中頃、C児が遊びの合間や降園前の時間にトラやライオンになりきり、吠えて驚かしながら同じクラスの子どもたちを追いかけることが続いた。怖がる人がいる一方で、真似して一緒にやる人や、「きゃー」と逃げることを楽しんでいる様子の人もいて、C児はその反応が嬉しいのだろうと感じていた。年中組の頃もC児がライオンになりきっている姿を別の学年の担任として見ていたが、今のC児がそうする背景に何があるのだろうと考える中で、電車好きの友達と遊ぶ時のC児の姿が思い浮かんだ。

１学期初め、電車好きな男児たちが電車や駅を作って遊んでいると、「電車の見えるレストランにしよう」というアイデアが出て、レストランの遊びが始まった。お客さんが来ると「少々お待ちください」など、店員になりきり、張り切って接客するC児の姿があり、印象的だった。それまでのC児は友達が始めることに一緒になって遊ぶことが多く、どこか自信のない印象だったが、店員になりきり遊びを引っ張る姿からC児は何かになると、普段より少し自信を持っていられるのだろうと感じた。

そのことを思い出し、またC児がトラになった時に「動物園みたいにする？」と提案した。すると、しばらくは走り回っていたが、「柵が必要だよね」と一緒に遊んでいた友達と保育室に戻ってきた。柵を作り、チケットやえさなどを準備していると、周りの人が気づき、お客さんになってくれた。それからもC児はトラやライオンになっていたが、その度に一緒に動物園を準備した。次第にその頻度が減り、１学期後半から２学期にかけて、C児がお店屋さんごっこをすることが増えた。くじ引き屋さんやアイス屋さんなど、友達を誘っていろいろなアイデアで場やものを準備し、お店屋さんを始めた。その中では決まって大人のような口調で店員になりきった。初めは保育室の中のお店だったが、次第に廊下にお店を開いたり、移動販売と言って自分から出向いたりするなど、C児自身が周りに開いていく姿も見られた。その頃には以前の自信のなさをあまり感じなくなり、自分から遊びを始める自信をつけてきていると感じた。

そして２学期終盤、C児は年少中組の降園前の集まりの時間に、ゲームを教えたり、歌を歌ったりするために日替わりでいろいろなクラスに行くようになった。先生や頼れるお兄さんなど、何かのイメージになっているのかはわからなかった。けれど、堂々と年少中児の前に立つ姿は、何かになって遊ぶこととはまた違い、C児がなりたい姿だったのではと感じる。また、異学年の降園や集まる時間を把握し、各担任に「今日行くからね」と事前に宣言しているC児。自分がなりたいものになれる場所を見つけて、自分でその機会をつくっていく力にも驚かされた。

C児のこれまでの姿を振り返ると、「なる」ことを通して、自分の世界を広げていったと感じる。初めは、人と関わりたくても驚かすことしか方法がない様子だったが、動物園の遊びに変えてみることで、自分から遊びが始まり、周りを巻き込んで遊びをつくっていくことを経験した。このことがその後のお店屋さんを始める姿や年少中児の前に堂々と立つ姿に繋がったと感じる。C児にとって普段の自分とは違う何かになることは、やってみようとする後押しになり、自信をつけるきっかけになったのだろう。（田村郁）

３．指定討論

“子どものありのままを受け止める”ことが大切だといわれる。はたして、ありのままとはどういうことだろう。その存在について、多角的に、深く、あるスパンを通して…といろいろ考えてみる。今回、「なる」姿から切り込むと、子どもが何にどう「なる」ことを、どのようにとらえたらよいだろうか。子どもが何かに“なっている”その時「今、自分は〇である。（いつもの）本人ではない」と自覚して演じている場合、憑依しているごとく自覚のない場合があるだろう。そしてその姿は、そもそも、“何”になっているのかわかりにくかったり、“なぜ”それになっているのかが理解できなかったりすることも多い。

姿が違うことの飛躍した例をあげてみる。トンボの成体は知っているが、その幼虫体ヤゴが羽化して成体となることは知らない、開花したヒマワリは知っているが、種はスナックだと思っている。これはトンボやヒマワリについて理解がないということだろうか。図鑑や動画で知識を得て、命の始まりからの循環を知ると、トンボやヒマワリのありのままを理解していることになるだろうか。育てる実体験が受け止めになるだろうか。

事例では、子どもが何になり、どういう自分になりたいと願っているのか、なんとか寄り添おうとする保育者の試みがある。「なる」姿は、客観的相対的にみれば「ある」姿といえるのか、自分の在り方を他者との関係性でとらえる姿か、追求していきたい。（村石理恵子）

©日本保育学会